

錦あすみ式 はみだしがた純愛二重奏

0 1 . G線上のあすみ

「あつ、あああああゝゝゝゝゝつ……！」

【あすみ】「ごっ、ごめんなさい、言ったそばからお水を……蓋を開ける前でよかった……ううう」

【あすみ】「わっ、笑わないでください……！先輩のお部屋へ来るの、久しぶりなので……緊張してしまつて……」

【あすみ】「きつ、緊張と言いますか、先輩のお部屋は……ここで普段、先輩が生活されているので……」

【あすみ】「大好きな人のお部屋なので……やっぱり特別な場所です」

【あすみ】「あ……」

【あすみ】「や、やっぱり隣同士だと安心しますね！この距離が好きというか……」

【あすみ】「膝の上で組んだ先輩の手を見ながら話せるこの位置が好きです。ご、ごめんなさい、おかしい趣味みたいに思われますね……」

【あすみ】「ひあっ！」

【あすみ】「あ、い、いえ……手を握られながら話すのも……好きです……」

【あすみ】「嬉しいです……先輩の手、好きなので……」

【あすみ】「ええと……」

【あすみ】

「そ、そうですね……」

【あすみ】

「はい……」

【あすみ】

「ごっ、ごめんなさい、私、誰かの部屋へお邪魔したことって幼いころしかなくて……最近だと、詩桜先輩のお部屋くらいで……」

【あすみ】

「こんなとき、なにから話せばいいのかすぐに浮かばなくて……ご、ごめんなさい」

【あすみ】

「ひよりんですか？ ひよりんは、はい、話しやすく……せ、先輩が話しにくいという意味ではなく！」

【あすみ】

「最近面白かった動画があれば、ぜひお聞きしたいのですが……せっかく先輩の部屋へ来ているのに、ちよっとお仕事の話っぽくなってしまいそうで……」

【あすみ】

「え？ 私となら、ずっと黙ったままでも大丈夫？」

【あすみ】

「ずっと手を握ったままでもいいって……うう先輩……」

【あすみ】

「先輩は本当に優しく、安心して……隣りにいて居心地のいい素敵な人です」

【あすみ】

「大好きです……」

【あすみ】

「先輩はいつも……隣りにいて、私を安心させてくれて……」

【あすみ】

「覚えていますか？　いつか雨の日に二人で帰ったときも……はい、まだ先輩とお付きあいしていませんでした」

【あすみ】

「あのとき、すごく緊張していて……えっ、そう見えませんでしたか！？　すごく、ドキドキしていました……まだドキドキとウキウキの境目が曖昧だったところで……」

【あすみ】

「先輩にバレていなくてよかったです。私自身、その気持ちの正体がなにか理解できていませんでしたから」

【あすみ】

「懐かしいですね、あれは先輩と出会ってまだ1カ月経ってないころの……夏休み前……」

0 2. げ元気～？ みんなは相合傘したことある？

【あすみ】

「ふう」

【あすみ】

「先輩！？」

【あすみ】

「あ、そんなに走らなくても……今日もお疲れ様でした」

【あすみ】

「はい、すごい雨ですね……そうなんです、傘持っていないで……もしかして先輩もですか？」

【あすみ】

「今朝の天気予報が晴れだったので……あ！ はい
そうです、雨野葉レマさんの……」

【あすみ】

「ですよ、今日は日本全国、丸いちにち日本晴れとおっしゃってましたよね」

【あすみ】

「あそこまで自信たっぷりと言われると、傘を持って出るのがレマさんに申し訳ないなあって……いて座も1位と言ってくださったので……明日の動画が楽しみです」

【あすみ】

「少し待っていればやむかなあって思ったんですけど、よけいに強くなってきたので……駅まですぐそこだし、思い切って走ってしまおうかなって……」

【あすみ】

「——え？ あれ、傘？ 先輩、レマさんのお天気占いを信じなかったんですか？ めっ」

【あすみ】

「あ、生徒会室に？ 備品の棚に……そうですね、今みたいな状況でしたら……借りてしまってもいいかもしれませんね」

【あすみ】

「え、私もいっしょにですか！？ あっ、えっ……ど、どうしよう。あっいえ、ぜんぜん迷惑ではないです！」

【あすみ】

「むしろ先輩にご迷惑が……その傘、折りたたみですよね？ 駅までの間とはいえ、かなり濡れてしまうのではと……」

【あすみ】

「え、私が傘を使って、先輩が全力ダッシュ？ あっただだめです！ それならごいっしょ……します！」

【あすみ】

「そうですね、遠慮する場面ではなかったかもしれませんが。ありがとうございます、先輩」

【あすみ】

「でっ、では……いきま、しょう！」

【あすみ】

「あっ駄目ですねこれ、普通に濡れますね……ですね、あのやはり、折りたたみで二人は無理がありますね……」

【あすみ】

「けど、引き返しても状況は悪化するだけですから……いきましよう！」

【あすみ】

「わぶっ！」「ごめんなさい！」

【あすみ】「えっ！？ あ、先輩の足が速かったわけでは……
そ、それに、急いだほうがいい状況ですし」

【あすみ】「あ、謝らないでください！ 先輩が謝るのなら……
…私も謝ります！ ごめんなさい！」

【あすみ】「私のほうにばかり傘をさしてくださるので……先輩が、なんかもう、すぐ……かなり濡れてしまつて……ごめんなさい！」

【あすみ】「あっ！？」

【あすみ】「は、はい、もつとくつついて……そうですね、くつつけば雨に濡れる面積が減りますし、歩く速さも合わせやすいですね……」

【あすみ】「で、ではあの、ええと……ど、どうしよう、もつと近づいたほうがいいのか……」

【あすみ】「あっ、あああああ……こんなときにまで、私の真上に傘をささないでください！ あっああっ、先輩がびしょ濡れに……あああああー！」

【あすみ】「せっ先輩、ごめんなさい！ 失礼します！」

【あすみ】「あっごめんなさい……こっ、これでどう……でしょう？ 腕を持たれると、歩きにくい……ですか？」

【あすみ】

「いつ、いえ、私は……というか、歩いてみないとわかりませんよね、あの……いきま、しょう」

【あすみ】

「えっ？ あ、レ、レマさんですか？ いえ、お話したことは……人気のあるかたですから、私みたいなへなちょことは……」

【あすみ】

「さん付け？ あ……私、レマさんのことさん付けしてますか？ というか、してますね。ごめんなさい、いま自覚しました」

【あすみ】

「で、でも、さん付けで呼ぶのって普通ですよ？ え？ 先輩と初対面のときに、私、シキちゃん呼びしてました？ シキだけ、ちゃん付けでした？ ほ、本当ですか？」

【あすみ】

「私、あのとき、頭の中が完全に沸騰してて……自分がなにを話したのかも、はっきりと覚えてないくらいで……」

【あすみ】

「はあ……先輩から指摘されて、初めて気づきました……無意識のうちに、自分がシキだとわかる証拠を漏らしていたなんて……今後は気をつけます」

【あすみ】

「あっ！ いま私、あの日の記憶があやふやみたいに言いましたけど、先輩からいただいた感想はちゃんと覚えてます！」

【あすみ】

「すごく嬉しかったので……家に帰ってから、何度も、何度も思いだしたので、今でも間違えずに頭の中で再生できるほどです」

【あすみ】

「え？ ブイチューバー……というか、シキの話ですか？ してもいいと思いますけど……あ、思いますじゃありませんね、私に聞いてるんですもんね」

【あすみ】

「そ、そうですね、生徒会室では困りますけど、こうして周りに聞こえない場所で、先輩と二人きりのときであれば……」

【あすみ】

「出会ったときにも言いましたけど、動画の感想を生で聞けたのは初めてで……もっとお話ししたかったくらいで……」

【あすみ】

「いっ、いえ！ ずっと秘密にしていたのは私のほうなので……ほんとはまだ謝りたりないくらいで……」

【あすみ】

「怪我の功名……怪我をしたのは先輩ですから、この表現は少し違うんですけど……今回の件で先輩にようやく告白できて、安心したくらいで……」

【あすみ】

「えっ、告白……ですか？ はい、先輩に……」

【あすみ】

「あっ違います、シキだと告白したという意味です！ あっ、あああー！」

【あすみ】

「だっ大丈夫です、先輩が謝ることでは……！ 勘違いされるような言いかたをしたのは私ですから！ ごめんなさい、私、言葉選びが本当に下手で……話し慣れていなくて……生徒会のみなさん以外とは、あまり会話しないもので……」

【あすみ】

「えっ『生放送でコメント選びは上手』？ 『失言は1回もしてない』？ は、はい、ありがとうございます……ございます……」

【あすみ】

「……やっぱり、帰り道にシキの話をするのは恥ずかしいですね。自分からお願ひしたのにごめんなさい、また落ちついた場所で、二人きりのときにお話を聞かせてもらってもいいですか？」

【あすみ】

「このままだと、嬉しさで興奮して……歩けなくなってしまうそうですから。今日はここまでにさせてください」

【あすみ】

「また、元気の出ないときに聞かせていただけると……嬉しいです」

【あすみ】

「あ、はい……送っていただいてありがとうございます……」

【あすみ】

「ところで先輩……少し気になってたんですけど、その、備品の棚にあったと言っていた傘……もしかして詩桜先輩の置き傘ではありませんか？」

【あすみ】

「はい、高級そうな傘なので……あ、やっぱり
イ・ビクンビクンのロゴが……」

【あすみ】

「この値段の傘を買える学生となると……アメリカ先
輩の傘にしては少し大人びたブランドですし、詩
桜先輩くらいしか……」

【あすみ】

「先輩が持っていたと知ったらものすごく怒るで
しょうし、私が返しに……あ！ 先輩、待って
くださ……お、お氣をつけて！」

【あすみ】

「先輩ありがとうございました、ふたりでお話し
きて楽しかったです！」

【あすみ】

「……今日はいて座が1位でよかったあ。レマさ
ん、ありがとうございます」

0 3 . 間奏曲・雪のワルツ

【あすみ】「先輩の隣に並んで、二人きりで帰れるのが嬉しくて……」

【あすみ】「雨に遮られた世界で、先輩を独り占めしてる気分でした。いけないなと思いつつ、すごくウキウキしてました」

【あすみ】「でもそのころから、先輩に対する憧れはあった……んだと思います。先輩の腕にしがみついて、ドキドキ……も、してたんだと思います」

【あすみ】「大好きな人でしたから」

【あすみ】「あっ今でも大好きです！ ごめんなさい、過去形みたいな言いかたして！ ただ、憧れていたところと違って、今はいつでも近くにいられる安心感があると言いますか……！」

【あすみ】「先輩の腕にこうして寄りかけられるのも、しがみつけるのも、お付き合いする前は特別な出来事でしたけど、今は自然に甘えられると言いますか……」

【あすみ】「あっごめんなさい、今は特別じゃないみたいに聞こえますよね。違うんです、先輩の体に触れられるのはいつだって特別な出来事で、でも、そんな特別がすぐそばにある今の生活がとても贅沢と言いますか、ああああー！」

【あすみ】

「ごめんなさい、私、失言が多くて……これじゃあ、お仕事でしゃべるときも余計なことを言ってしまうですね、気をつけます……！ ううう」

【あすみ】

「あっ……」

【あすみ】

「あっ、ご、ごめんなさい、こんな、先輩の膝の上に……混乱した私を落ちつかせるために……」

【あすみ】

「と、と言いますか、先輩、すごく力あるんですね……両手だけで私を膝の上に……ひょいっと持ちあげられたので、驚いてしまいました……」

【あすみ】

「いえ、私が軽いわけでは……え、軽い？ もっと食べたほうがいい？ はい……最近は食欲あります……」

【あすみ】

「でも、先輩に後ろから抱きしめてもらえると……すごく安心します」

【あすみ】

「こうやって膝にのせてもらっていると……卒業式前に、先輩のおうちへお邪魔したときのことを思い出しますね……」

【あすみ】

「はい、あの日のこともよく覚えています。先輩とひよりんのおうちにお邪魔して、3日めでしたね……」

0 4 . げ元気～？ みんなは卒業式で泣いた？

【あすみ】

「今日もお邪魔します……」

【あすみ】

「えっ『ただいま』ですか？　そ、そんな恐れ多い……いえ、恐れはしませんけど、ひよりんにとつて図々しくないかが心配で……ひよりん、先輩と暮らすこのうちを、とても大切に想っているの……」

【あすみ】

「ひよりんも歓迎してくれてる？　えっ！　ひよりんが『ただいま』と言わせると……そ、そうでしたか」

【あすみ】

「で、では、お言葉に甘えて……ただ、ただいま」

【あすみ】

「……です！」

【あすみ】

「ごっ、ごめんなさい、自分を待っている誰かに対して『ただいま』って言うの久しぶりで……！　まだ慣れなくて……！　ああっ、ごめんなさい！　努力します！　かつ、からかわないでください……」

【あすみ】

「はい、小さいころなら……自分の家では『ただいま』って言っていました」

【あすみ】

「最近はいつも一人なので、なんだか懐かしいです……ほっとすると言いますか……」

【あすみ】

「今度、先輩が私の家へ来たときも『ただいま』って言うてくださいね」

【あすみ】

「えっ大胆に聞こえましたか！？ そそっ、そんなつもりでは……ああああ！」

【あすみ】

「ワンちゃん、ただいま……あ、ぐっすり寝てる……」

【あすみ】

「先輩は家に帰ったら、まずダイニングへ来るんですか？ ワンちゃんのお世話を？ 私、動物は飼ったことがないので新鮮です」

【あすみ】

「はい、そうですね……父も母も生活のリズムが一定しませんから、動物のお世話はとても……父は1年の半分以上を海外で過ごしていた時期もありましたし……はい、それで海外へ拠点を移したみたいです」

【あすみ】

「もうこっちに帰ってくるつもりはないんじゃないかなあ……にやるせの家も私が住んでいるから残しているだけで、本当は引きはraitたいんだと思います」

【あすみ】

「私ですか？ いえ、両親のいる環境でVTube rのお仕事は恥ずかし……難しいですし、打ち合わせなどもありますから……ライブだってまたお呼ばれしたいですし！」

【あすみ】

「それに、日本のコンビニは使い勝手が良すぎて……コンビニに頼るような生活を両親の前で見せられませんし、今から同居は……このだらしない生活を改善できる自信もありませんし……」

【あすみ】

「はっ、はい、両親のいたところは、朝7時に起きて夜の23時には寝て……規則正しい生活を送っていました」

【あすみ】

「最近は登校しているので少しは改善していますけど、生放送の時間は夜だし、曲作りをしているときは夜通し……なので、お恥ずかしい限りです。はい、先輩にはすべて知られていますから……」

【あすみ】

「それと、海外に行けない一番の理由は……先輩がいないので……」

【あすみ】

「はい、先輩のいない環境で今の活動を続けられる自信は無いので……重かったらごめんなさい」

【あすみ】

「あっいえ、先輩に責任のようなものはなく……！先輩と出会った時点で、少し、生活に追い詰められている感もありましたから、限界に近かったのかもしれない」

【あすみ】

「ですから、私の活動を制限するどころか、助けていただいたくらいで……何度も言っちゃってしまいますけど、私にとっては、運命的な出会いをした神様のような存在なんです、先輩は……」

【あすみ】

「そんな人に天使みたいだと言われて、それどころか、こうしてお付き合いまでしていただいて……感謝という一単語だけでは言い表せない気持ちを抱えています」

【あすみ】

「好きです」

【あすみ】

「あ、ここでは……！ ワンちゃんもいますから……！ ひよりんといっしょにごはん食べる場所ですし……！」

【あすみ】

「は、はい、抱きしめる……抱きしめていただくけなら……あの、ごめんなさい。おかしい想像を……してしまって……」

【あすみ】

「え、そのつもりで？ そつ、そうですね、また日を改めて……ひよりんが帰ってくるまで、そんなに時間ないでしょうし……」

【あすみ】

「あ、体調はもうまったく……このおうちへ来てから、すっかり元気になりました。ごはんがおいしいくらいで……」

【あすみ】

「はあ……」

【あすみ】

「あ、いえ、テレビはあまり……自分の関わった番組以外は、テレビをほぼ見ない両親だったので、私も自然と……はい、音が欲しいときは好きな曲を……」

【あすみ】

「先輩はいつも帰ってきたらテレビを見て過ごすんですか？ あ、スマホのなかったころはひよりんの出てるアニメを……」

【あすみ】

「ひよりんといっしょにテレビを見たりもしますか？　こうやって膝にのせて……抱っこしたり」

【あすみ】

「あっ抱っこはしませんか！　ででですよね、ごめんなさい私、兄妹がいらないから距離感がわからなくて……！　そういえば以前も、ひよりんを抱っこはしないっておっしゃってましたね！」

【あすみ】

「でも、先輩にこうやって後ろから抱きしめてもらうのは……とても幸せな気持ちになれますから、ひよりんも……と、思っていました」

【あすみ】

「今度、してあげてはいかがですか？　私がひよりんなら嬉しいと思います。お、おかしいですか？　そ、そうですか、兄妹ってそういうものなんです」

【あすみ】

「私なら、先輩が自分のお兄ちゃんだったりすれば、こうして、膝の上にのせて抱きしめてもらえると、嬉しい……んじゃないかなって思います」

【あすみ】

「嫉妬ですか？　嫉妬は別に……ひよりんは先輩の妹さんですし、先輩を大好きなことも知っていますから……」

【あすみ】

「アっ、アメリカ先輩ですか？　アメリカ先輩のときは、先輩と出会ったばかりで私も自分の感情がよくわかっていなかったのと、まだ集団生活に慣れていなかったの……うううう」

【あすみ】

「あっ、あのときのことは反省しています……！
もうっ、先輩は意地悪です！ でっ、でも、ひょ
りん以外は……やっぱり、先輩に抱きしめてほし
くは、ないです……」

【あすみ】

「はっ、はい、今は私だけです……はい、嬉しい
です。ごめんなさい、わがまま言って……わがま
まじゃない？ そっ、そうですね、そうだとい
いんですけど……」

【あすみ】

「……以前は先輩のそばにいられるだけでよかった
はずなんですけど、少し贅沢になってしまったの
かもしれません。ごめんなさい、できるだけ先輩
を困らせないようにします」

【あすみ】

「はっ、はい、もちろん私だけを見ていただけると
嬉しいですけど、だからと言って、あまり多くを
要求するのは……やっ」

【あすみ】

「せっ、先輩、どうして耳を……！ そんな、愛し
いからって……んっ、やあっ……」

【あすみ】

「いっ、いえ、嫌ではないです……体調は問題あり
ませんし、最後まででなければ……いえ、ここが
ダイニングではなく、ワンちゃんもいなければ、
最後までだって……」

【あすみ】

「あっ、やっ……！ せんぱい、首は……！ くす
ぐったいです、んっ……！」

【あすみ】

「やつ、んう……はっ、ふうっ……んっ、はあっ……せんぱい……好き、です……」

【あすみ】

「はっ、はあっ……先輩の家で、こんな……あっ、いえ、嫌ではないです！ 嫌ではないんです、あのっ……」

【あすみ】

「せ、先輩っ！」

【あすみ】

「んむっ！ んむう……んっ、んむ……はっ、はあっ……」

【あすみ】

「はっ、はい……自分からキスしたくなるくらいに、先輩のことが好きです……ここがどこであっても、先輩から愛してもらうのが嫌だなんてことはありません……」

【あすみ】

「ただ、先輩の家で……自分の部屋以外で先輩とこうする機会がなかったので、少し緊張しているだけです……感覚的にはお外と変わらないと言いますか……」

【あすみ】

「そっ、そうですね、いずれはこの家も……安心してきる場所になるといいなって……なると思います」

【あすみ】

「こうして先輩と自然にキスできる場所になるといいなあって……思います」

【あすみ】

「でも、はい、できるだけひよりんと普段話さない
場所で……はい、やはり思いだしてしまうので…
…少し気まずいと言いますか」

【あすみ】

「あっはい、今は大丈夫です……私も、もう少し甘
えたいので……あと少しだけ、膝の上にいさせて
ください」

【あすみ】

「もしお願いできるなら、先輩のほうを向いてもい
いですか？」

【あすみ】

「そっ、そうですね、向かいあわせで……いつ、今
より恥ずかしいですか！？ そっ、そうですね、
あのっ、私……！」

【あすみ】

「……いえ、自分からお願いしたことなので……先
輩がいいと言ってくださるのであれば、遠慮する
つもりはないです……」

【あすみ】

「でっ、では、失礼します」

【あすみ】

「先輩の顔がこんな近くに……ド、ドキドキしてし
まいますねっ」

【あすみ】

「あ、公園のときは……はい、わがままを言って大
変ご迷惑をおかけしました。まだお付き合いして
いなかったころなのに……」

【あすみ】

「め、迷惑じゃなかったと言っていただけるのは嬉しいんですけど、いま思うと非常識なお願いだったなというのは否めないで……」

【あすみ】

「『いまじゃなくても、当時から非常に大胆だと思った』？　せ、先輩iiiiiiii……」

【あすみ】

「だ、だから、一度断ったのに……言ったら嫌われると思ったのに、最後まで言いなさいと叱られたので……はい、途中まで言いかけてやめたのは私なんですけど……」

【あすみ】

「先輩は意地悪です。もうっ」

【あすみ】

「んむっ」

【あすみ】

「ん、んむう……んむっ！？　んう、れろっ……はっ、れろ、ちゅっ……れろっ、ちゅうっ、んむう……！」

【あすみ】

「んちゅ、れろっ、ちゅっ、んちゅっ、ちゅうっ……れろっ、はあっ、んっ、んむっ……はっ、はあっ……」

【あすみ】

「エ、エッチなキスをされるとは思いませんでした……はい、キスをしたのは私ですから、ぜんぜん嫌ではないです……」

【あすみ】

「先輩から私にしていただけで……嫌なことなんてひとつも……」

【あすみ】

「あっやああっ……服の中は……！ あの先輩、最後までは……！ うっ、ううっ？ は、はいっ、途中までなら……！」

【あすみ】

「はっ、はあっ、やっ、せんぱい……やっ、んっ、手が……いやらしくて、くすぐったさが……やっ、はああっ……！」

【あすみ】

「あっ、ワンちゃんが起きてる！ ううう先輩、ワンちゃんが見ているので、これ以上は……やっ、んうっ……！ はっ、ふあっ、やあっ……！」

【あすみ】

「はっ、はあっ……そ、そういえば、公園で膝の上へのせてもらったときに……ワンちゃんを抱っこしてるみたいとおっしゃってましたね……！」

【あすみ】

「あっいえ、悲しかったり残念だったり……そんな、失礼だなんてことは……！」

【あすみ】

「私、先輩に抱っこはされたかったですけど、当時はまだいやらしいことに抵抗があって……でも男性の上にいるのはいやらしいことという自覚はあって……そ、そうですね、上にのるというか、またがると言いますか……！」

【あすみ】

「言ってること矛盾してるんですけど、でも先輩なら……いやらしいこと抜きに抱っこしてくれるんじゃないかと、ヘンな期待をしていました……！」

【あすみ】

「ですから、おうちのワンちゃんだったり……子犬や小動物みたいだと言われて安心しました。私にとって、すごく嬉しい言葉だったんです」

【あすみ】

「で、でも、今は……ごめんなさい、私のほうが……」

【あすみ】

「いえ、でもこのくらいならワンちゃんでもしますよね……？」

【あすみ】

「れろっ」

【あすみ】

「れろっ、ちゅっ、れろっ……んっ、先輩の味……れろっ、れろお……ちゅっ、ちゅっ……」

【あすみ】

「はっ、はあっ……次は耳を……」

【あすみ】

「あっダメです！ さっき、先輩も私にしたんですから……逃げたらダメですよ」

【あすみ】

「れろっ……れろ、れろっ……ちゅっ、れろっ……はあっ……」

【あすみ】

「今度は反対側も……」

【あすみ】

「あっ！ 逃げちゃダメです、許しません！ 何度も意地悪されてしまったので、今日の私は厳しい女です。くすぐったいのも我慢してください」

【あすみ】

「れろっ……ふうっ、れろっ……ふふっ、れろっ、
れろお……ん、れろお……」

【あすみ】

「んっ、やっ……！　せ、先輩、まだ私、途中で…
…あっ、やんっ！　うう、下着の中は……あっ、
スカートの中は……！」

【あすみ】

「あっ、ほらっ！　ひ、ひよりんが帰ってきました
よ！　あ、でもまだこの時間だと……ミリ先生で
すかね？」

【あすみ】

「とっ、とりあえず、降りますね……あの、先輩。
私、嫌ではありませんから……ただ、別のことに
気を取られたくなくて……」

【あすみ】

「卒業式が終わったら、先輩の求めになんでもお応
えしますね」

0 5 . 間奏曲・天使のワルツ

【あすみ】

「先輩……」

【あすみ】

「ごめんなさい、また膝の上にのってしまって……昔の話をしていたら、つい懐かしくなってしまうて」

【あすみ】

「あのとき……あ、最初に膝の上へのせてもらったときの……はい、公園で先輩の上にのったときは……」

【あすみ】

「すごく恥ずかしくて、でも先輩を独り占めしてるみたいで嬉しくて……逃げだしたい気持ちと、ずっとこのままでいたい気持ちが頭の中でこんがらがって、それまでにないくらいドキドキしました」

【あすみ】

「みんなの先輩でいて欲しいとお願いしておきながら、私だけの先輩になって欲しいと……そんなずるいことを、初めて考えた日かもしれません」

【あすみ】

「それが今、こうして先輩を独り占めできて……本当に幸せです」

【あすみ】

「大好きです」

【あすみ】

「あ……と、というか、ずっと先輩の上にのったまま話し続けてごめんなさい。重くありませんか？」

【あすみ】

「昔より軽い……そ、それはいくらなんでも……1日に1食しか食べてなかった時期に比べると、最近は朝昼晩3食とってますし……」

【あすみ】

「えっ体重……せ、先輩、それは先輩と言えど失礼ですよ。めっ」

【あすみ】

「いえ、さすがに40キロは切っては……いつ、いち時期はそんな数字で、ひよりんやアメリカ先輩に心配もされましたけど……はい、健康的な生活と言える体型には……なっただと思います」

【あすみ】

「鳴門さんが単独ライブにかなり本気で……でも15曲、それにアンコールも含めると、あと3曲は欲しいみたいで……」

【あすみ】

「この間のライブでは6曲歌わせてもらいましたけど、そのときですらヘトヘトだったので……先輩はご存知だと思いますけど……」

【あすみ】

「それもあって、最近は体力作りをしています。先輩に相談するのは恥ずかしかったので、詩桜先輩に教わって運動を……」

【あすみ】

「だ、だって、運動してるところを先輩に見られなくありませんから……先輩に……好きな人にへなちょこな姿を見られるのは、やっぱり……情けないです」

【あすみ】

「えっ、どんな運動を……ですか？ あ、歩いたり、体操したり……」

【あすみ】

「登下校以外で1日5千歩くらいは……う、うう、もうちょっとがんばりたいですね。そろそろ真剣に体力作りと向きあうつもりです」

【あすみ】

「今後は……そばで見ているだけで構いませんから、先輩も付きあってください。あまりにへなちよこな私を見て、笑われてしまわないか心配です、けど……」

【あすみ】

「あっ、ああっ、そんなに笑わないでください！ 体力作りをしたいですって話しただけなのに、うう……」

【あすみ】

「でっ、でも、この間のライブのあとだって、先輩と……そ、そのくらいの体力はあります！」

【あすみ】

「あのとときだって、すごく激しかったです……よね？」

06. ライブのあとは体が熱いよね！

【あすみ】

「あっ」

【あすみ】

「ごっ、ごめんなさい、先輩にお出迎えさせてしまつて。お待たせして……あ、いえ、ひとりでお留守番させてすみませんでした」

【あすみ】

「あっ、謝るよりただいまが先？ あっ、ああっ、ごめんなさい……じゃありませんでした、ただいま帰りました……！」

【あすみ】

「えっ？ とりあえず中に……そそっ、そうですね、先輩を立てたせっぱなしですもんね……あっごめんなさい、ずっとドアを支えてもらってたんですね！ ホテルのドアって、なぜかどこも重いですよね……」

【あすみ】

「とりあえず、おじゃ、お邪魔します……」

【あすみ】

「えっと……」

【あすみ】

「はい、じゃあここに……ありがとうございます」

【あすみ】

「あ、私たちの部屋と少し違うんですね……はい、真ん中に大きなキッチンがあつて……いえ、料理はしませんよ。でもちよつと切ったり、焼いたりくらいならするかもしれません」

【あすみ】

「そ、そうですね、ここより広い……と思います。ごめんなさい、私と鳴門さんの二人なので……」

【あすみ】

「そっ、そうですか。充分いい部屋で……先輩が私たちとの差を感じていなければ……はい、安心しました」

【あすみ】

「あの、お待たせしてごめんなさい……退屈じゃありませんでしたか？」

【あすみ】

「あ、ＴＬを辿ってライブの感想を……はい、先輩が時間を持て余していなければそれで……スマホさえあれば無限に時間を潰せる？」

【あすみ】

「安心しました。ただ、先輩も打ち上げに参加したかったんじゃないかと思って……」

【あすみ】

「え、行きたくない？ 知らない人と話すのが苦手？ そ、そうですか。詠歌さんも話したかったみたいで……え、できれば御免被りたい？ そうですか」

【あすみ】

「私も……大勢の中にいるのは苦手……苦手というよりも疲れてしまうんですけど、他のライバーさんやミュージシャンのかたと話せる貴重な機会なので……」

【あすみ】

「それでも、やっぱり疲れて、こうして途中で帰ってきてしまいました……体力の無さは反省しないといけませんね」

【あすみ】

「それと打ち上げの場は、ライブが終わったという実感というか、熱量を発散させられる場でもあるので……先輩にも一度体験してもらいたいな、と思います」

【あすみ】

「はっ、はい、私にとって、今が一番大切な時期で……男性がそばにいれば誤解を受けやすいというのも理解はしているんですけど……学生だとけいに気を使わないといけないのも」

【あすみ】

「先輩はもう正式なスタッフですし、いろいろお手伝いもしていただいていますから」

【あすみ】

「男性のライバーさんや、スタッフのかたやマネージャーさんが打ち上げに参加しているので、先輩にいていただいても……」

【あすみ】

「はい、私が先輩にべったりなのがいけないんですね。はい、反省します。でも、自分でコントロールできるものでもないの……はい、ごめんなさい。自覚はあります」

【あすみ】

「こうして、自分の部屋へ戻るより先に、先輩の顔を見たくなくなってしまったところがいけないですね。でもごめんなさい、私は一人だと、まだへなちょこなので……」

【あすみ】

「まだ鳴門さんや生徒会のみんなや……先輩に甘えさせてください」

【あすみ】

「鳴門さんですか？ はい、ホテルの入り口まで送ってくれたんですけど、また打ち上げ会場へ戻るみたいで……二次会もあるようなので、最後まで参加するそうです。イベントのスタッフさんたちとの交流も大切だと言っていました」

【あすみ】

「私の代わりに、進んで打ち上げに参加してください。さっているんだと思います。感謝しないといけませんね」

【あすみ】

「とはいえ私は学生なのもあって……二次会からはお店も変えるみたいですから、どのみち最後まで……はい」

【あすみ】

「あ、でも！ さっきも言いましたけど、打ち上げそのものが苦手というわけではないんです！」

【あすみ】

「話してみたかったライバーさんもいますし、貴重な情報交換の場ではあるので……ただ、私が人と話しているとすぐに体力を消耗してしまうだけで……」

【あすみ】

「私自身、ライブの興奮を誰かに訴えたい気持ちはあって……ただ、それをできるほど甘えられるのが、今はまだ先輩とひよりんと生徒会のみなさんだけというだけなんです」

【あすみ】

「そっ、そうですね、お友だちができれば、いつかは……でも、私にとって一番気兼ねなく話せて好きに甘えられるのは、やっぱり先輩みたいです」

【あすみ】

「どんなにおかしなことを言っても、どれだけ図々しいことを言っても、先輩には、もっと恥ずかしい発言を何度も聞かれているので……」

【あすみ】

「そうですね、自分の正体を隠して、シキが好きというのは……あとから正体を明かしたときに、とても恥ずかしかった、です……」

【あすみ】

「わっ、笑わないでください、笑わないでください！ うう……で、でも、そうやって笑ってくださる先輩だから、甘えられているところはあつて……」

【あすみ】

「はい、今も体の疲れはありますが、気持ちの面では元気が有り余って困ってるくらいです。話したいことが渋滞を起こしていて……先輩にはあれも話したい、これも話したいが次から次に湧いてきて……朝まで話していたいほどで……」

【あすみ】

「そ、そうですね、鳴門さんが帰ってきたら、さすがに部屋へ戻ります。ただ、えっと……気持ち的には、先輩と話してる今がすごく元気ですと伝えたくて……そっ、その、朝までいるつもりだったわけでは……！」

【あすみ】

「あっ、あのっ！ うううう……抑えきれない体の熱を冷ましたい気持ちは、あります」

【あすみ】

「あっ、えっ！ 私、いま大胆なこと言いました！？ ごっ、ごめんなさい、そこまでのつもりはっ……！ ああああー！」

【あすみ】

「いっ、いえ、話すだけじゃなく……その、つもりでお邪魔した部分もあります、から」

【あすみ】

「先輩におねだりするつもりで……甘えたい気持ちがありました」

【あすみ】

「あっ、いえっ！ ライブの話をしたい気持ちもあるんですけど、先輩もその気になってくださったのなら……！」

【あすみ】

「は、はい、体の疲れもあるんですけど、今はその疲れも心地よくて……このまま先輩に愛していただけたらと……思っ……」

【あすみ】

「あっ！」

【あすみ】

「あ、こ、こんなに強く……いつも先輩は優しいので、こんなに荒っぽくは……いえ、私も期待していましたから……」

【あすみ】

「ライブに感動して？ そう……言ってもらえると嬉しいです。先輩が、気持ちを抑えきれないほど体に熱を宿してくださったのなら……」

【あすみ】

「私で発散してください。今日は私も、自分から甘えたい欲が……先輩に、自分からしてみたい気持ちを抑えきれなくて……」

【あすみ】

「れろっ」

【あすみ】

「あっごめんなさい、びっくりさせましたか！？でも、今日は私からしてみたくて……」

【あすみ】

「今ちょっと胸がきゅっとしました……先輩の反応と、驚く顔を見て……」

【あすみ】

「いつも私にしてくれる先輩は、こんな気持ちなんでしょうか……ごめんなさい、あの……とてもドキドキしてます」

【あすみ】

「興奮、してます。先輩、好きです……先輩……」

【あすみ】

「れろっ、れろ、れろお……ふっ、れろっ……ふっ……」

【あすみ】

「あ、笑ってはいけませんね、ごめんなさい……先輩の反応を見て笑ったわけではないんです、ただなんだか、先輩とじゃれ合っているみたいで、すごく楽しくて……」

【あすみ】

「子どもみたいな気分です……エッチなことをしてるのに、これではいけませんね……れろっ」

【あすみ】

「れろ、れろ、れろっ……ふうっ、れろお……ちゅっ、れろっ……先輩……れろっ、ふうっ、れろお……」

【あすみ】

「ふうっ……くすぐったいですか？ ふふっ、今日は私からさせてください……れろっ、ふうっ、れろっ……」

【あすみ】

「こっちも……」

【あすみ】

「先輩……こんなこと言ったら怒られるかもしれないけど、ごめんなさい、先輩の反応が……愛しいです、今日はずっと……先輩の体を舐めていたくらいに……」

【あすみ】

「先輩が嫌じゃなければ、もっと色んなところを舐めさせてください……自分でもよくわかりません、先輩の体に舌で触れると……舌を這わせると、体が熱くなるんです……」

【あすみ】

「れろっ、れろっ……はあっ、れろお……ふふっ、先輩のお顔、好きです……」

【あすみ】

「キス、しますね……」

【あすみ】

「んっ……んむっ、ちゅっ……ん……先輩……」

【あすみ】

「はあっ、何度キスしても……そのたびにドキドキして……先輩に恋をします……」

【あすみ】

「んっ、んむっ、んう……ちゅっ、ちゅうっ……れろっ……はっ……」

【あすみ】

「れろっ、ちゅっ、れろっ……ん、ちゅっ、はっ、はあっ、れろっ……んっ、ちゅっ、れろっ……はあっ、先輩……」

【あすみ】

「先輩とのキスは……いやしくても好きです……ちゅっ、れろっ、んむっ……はっ、はあっ……」

【あすみ】

「はっ、はあっ……ふふっ、舐めすぎて舌が乾いてきたんですけど……先輩に唾液を分けてもらいました……れろっ」

【あすみ】

「首も……私は、先輩にしてもらうと、我慢できないくらいくすぐったいので……先輩が我慢できなくなるまでしてみたいです……」

【あすみ】

「ふふっ、くすぐったいですか？ 先輩が……先輩の色っぽい声が、あの……とてもエッチで……興奮、してます」

【あすみ】

「でも、どうしても嫌なら言ってください……え？ 動物に舐められてる感覚？」

【あすみ】

「あ、あのっ！ 私、先輩の恋人で……！ 前に抱っこしてもらったときは、ペットみたいって言われても嬉しかったですけど、今日は……！」

【あすみ】「わ、私が先輩を、責めているつもりだったので……」

【あすみ】「ど、どうして笑うんですか？ えっ、責められてるというより、甘えられてる……？ うううう、先輩iiiiiiii……！」

【あすみ】「じゃ、じゃあ、あのっ！ 先輩の……胸を舐めます！」

【あすみ】「くすぐったくて我慢できなくてもやめません、今日は私が責める側ですから……」

【あすみ】「いつも私が我慢できなくて……駄目ですと言っても、先輩は私の胸を……噛むので……」

【あすみ】「れろっ、れろお……あっ、逃げないでください！ ふふっ、ここは我慢できませんか？」

【あすみ】「少しでも我慢してください……れろっ、こんな先輩、珍しくて……もってしてみたくなって……」

【あすみ】「れろっ、れろ、れろお……れろっ、ちゅっ、少し噛みますね……あむっ……」

【あすみ】「あっ、先輩……先輩がそんな、甘い息を漏らすの……私、興奮してしまって……れろっ」

【あすみ】「先輩、好きです……れろっ、ちゅっ、ちゅっ……かぷっ……」

【あすみ】

「あっ、も、もういい、ですか？ はあっ、はっ……ふふっ」

【あすみ】

「くすぐったそうにする先輩、素敵でした……！あの、嫌な気持ちになったのなら謝りますけど、えっと……先輩を、かわいらしいと思ってしまっ……て……」

【あすみ】

「いつも先輩にかわいがっていただいているので、自分でも少し不思議な気分です。もっと……いたずらさせてください」

【あすみ】

「えっ、いつになく積極的？ はい……ライブのあとで体に熱が残ったままで……それに加えて、普段あまり見られない先輩の顔を見せていただいたので、いま私、興奮しています」

【あすみ】

「先ほど動物ではなく恋人ですと言いましたけど、今日の私は虎です！」

【あすみ】

「えっ虎というよりウサギ？ 小さな白ウサギ……？ ドワーフホトですか……？」

【あすみ】

「私、ウサギですか……ウサギって、なつくと好きな相手を舐めますか……？」

【あすみ】

「でも、ウサギの性欲は旺盛だと聞いた記憶があります。それなら今日の私は、愛情が溢れて仕方ないウサギです。先輩、覚悟してください……！」

【あすみ】

「あ、歯は立っていないから安心してください。足ダン
もしません」

07. いつまでも熱が冷めなかったりするよね！

【あすみ】

「あつ、先輩がこんなに大きく……」

【あすみ】

「もし胸を舐めたからこんなに大きくなっているのであれば……先輩に悦んでもらえたみたいで嬉しいです」

【あすみ】

「えっ普段と同じ？ 胸は関係ない？ そ、そうでしょうか……」

【あすみ】

「でも、先輩がそう仰るのなら、胸を舐めたのは関係ないですよね……先輩、切ない目で、唇をきゅっと噛んで、声を出すのを我慢しているみたいだったので、感じてくださったのかと……」

【あすみ】

「あつ！ 先輩は違うとおっしゃいましたが、先のほうから少し出て……？ これは気持ちいいから出るものですよね？」

【あすみ】

「それならやはり、先輩は胸が気持ちよかったんですね。よかったあ」

【あすみ】

「あつ、ええっ！？ あ、あのっ！ 私はあとでいいですから……！ 先輩にしてさしあげたあとで……！」

【あすみ】

「いっ、いえ、ええと……私は……先輩に吸っていただいたり、噛んでいただいたりすると気持ちいいので……てつきり先輩も同じ感覚なのかと……」

【あすみ】

「はい……先輩に、か、かわいがられると、いつも声が我慢できなくなるほど気持ちいいので……胸以外にもですけど、胸は特に……」

【あすみ】

「すごく切ない気持ちになって……でも先輩にかわいがられてると思うと、どうしようもなく幸せで……ですから、先輩に胸をいじられるのは好きです……」

【あすみ】

「先輩がとても切なそうな顔をされていたので……自分がされているときのような、胸が締めつけられて、でも好きな人が愛しくて仕方ない、あの感覚になっているのかなって……」

【あすみ】

「えっ私の好きにしていいいんですか？ でも、どうして急に？ あ、けど、せっかく先輩から任せていただいたんですから、気持ちよくなっていただけるようにがんばりますねっ」

【あすみ】

「先輩にお仕事を任せていただけるのは、会長と書記だったころを思いだして、嬉しくなってしまうですね……あっいえ、お仕事ではないんですけど……」

【あすみ】

「でも、仕事をこなせたとき、先輩に誉めていただけるのが大好きだったので、せいっぱい務めを果たします！」

【あすみ】

「で、では……れろっ」

【あすみ】

「れろ、れろっ……あっ、先輩、ますます気持ちいいのが出てきて……れろっ、ちゅっ」

【あすみ】

「ん、ちゅっ……れろ、れろっ、ちゅっ……はっ、はあっ……れろっ、ちゅうっ……」

【あすみ】

「ん、れろ、れろお……はあっ、ちゅっ、れろっ、んっ……ちゅっ、れろっ、ど、どうでしょうか……」

【あすみ】

「えっ私ですか？ いえ、疲れて……は、いるはずなんですけど、今はそんなに……意識するほどでは」

【あすみ】

「もしかして今日は嫌な日だったりしますか？ 私に付きあわせてしまっていたり……」

【あすみ】

「あっそんなことないんですね、ごめんなさい深読みすぎました。私からグイグイねだってしまったもので、もしかしてと考えてしまいました。余計な心配でした」

【あすみ】

「はい、そうでしたね。いつも自分より、私の心配をしてくださるのが先輩でしたね。でも大丈夫ですよ、その……さっきも言いましたけど、今日は体が熱いので……」

【あすみ】

「私が先輩に愛してほしいので……しっとりと愛しあいたかったのなら、ごめんなさい。今日は情熱的な私です」

【あすみ】

「そんなことはない？ この大きくなっているものを見て……ですか？ ふふっ、そうですね、大きくなっていて……嬉しいです」

【あすみ】

「れろっ、ちゅっ、れろっ……んっ……同じことをまた聞いてごめんなさい、どうですか？ 上手くできていますか？」

【あすみ】

「よかったです。先輩の体を舐めたときに、口の中が乾いてしまったので、気持ちいいか心配だったんですけど……安心しました」

【あすみ】

「ちゅっ、れろっ……ん、ちゅっ……れろ、れろっ……れろお……ちゅっ、んむ……」

【あすみ】

「はっ、はあっ……啜えたほうが……」

【あすみ】

「あむっ、んっ、んむ……ちゅうっ、んむっ、んじゅる……んむっ、れろっ、じゅぶう……」

【あすみ】

「んむっ！ ぢゅぶっ、んちゅっ、じゅぶっ……はッ、はあっ……れろっ、んじゅうう、ぢゅぶっ……」

【あすみ】

「じゅぶっ、んむっ、ぢゅぶるっ、んむ、じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぼっ、ちゅぽっ」

【あすみ】

「あっ、すごくいい……ですか？ よかった、先輩にそう言ってもらえると嬉しいですよ……」

【あすみ】

「昔みたいに誉めて……ちょっと頭を撫でてくださったりしても構いませんよ。はいごめんなさい、そうですね、自分からねだるものでは……」

【あすみ】

「あっ……や、やっぱり先輩に撫でてもらえると嬉しいですね。上手にできたときに誉めてもらえるのは……」

【あすみ】

「付きあう前は、そんなに何度も頭を撫でてもらったわけではありませんけど……だからこそ、少しでも頭を撫でてもらえると……その日は一日幸せでした」

【あすみ】

「そのために、また次もがんばろうって思えました。ですから今日も……上手にできたら、撫でてください」

【あすみ】

「ん、あむう……んむちゅう……ちゅっ、んちゅっ、れろっ……」

【あすみ】

「んちゅ、んむ、んむっ……じゅぶっ、んぢゆるう……ぢゅぶっ、んじゅぶっ、ちゅぶっ、んちゅっ」

【あすみ】

「はっ、はあっ……えへっ、撫でてもらうと、先輩の気持ちいいタイミングがわかって……より上手にできる気がしてきました」

【あすみ】

「あむっ、んっ、じゅぶっ、んじゅぶっ……じゅぶっ！ んじゅるっ、ぢゅぶっ！ んじゅぶっ、じゅぶんっ！」

【あすみ】

「じゅぼっ！ じゅぶるう、んぢゅぶっ！ じゅぶんっ、じゅぶ！ じゅぶるっ、んじゅるっ！ じゅぶぶっ！」

【あすみ】

「ぶはっ、はあっ、はっ……せんぱい、出したければ出してくださいね……あ、このあと出せなくなったら困ります、けど。だっ、大丈夫ですよ？」

【あすみ】

「先輩に撫でただくのは嬉しいですけど、その余裕もなくなって……手が力んでるのも……嬉しいです」

【あすみ】

「んむっ、んちゅっ、んじゅるっ！ んじゅぶっ、ぢゅぼっ、じゅぶるっ！ んじゅっ、じゅるるっ、ぢゅぼんっ！」

【あすみ】

「はあっ、はあっ……せんぱい、我慢せずに……出したいときに出してください、口の中で……構いませんから」

【あすみ】

「んっ、あむっ、んっ、んぢゅぶっ、じゅぶっ！ じゅぶぶっ！ ぢゅぼっ、んじゅぶっ、ぢゅぼんっ！ じゅぶ、ぢゅぶぶぶっ！」

【あすみ】

「はっ、はあっ、んじゅぶっ！　じゅぶぶんっ！
んじゅぶ、じゅぶっ、はあっ、はっ、んじゅ
るう、ぢゅぼぼっ！　じゅぼんっ！」

【あすみ】

「んむっ！？　んむううううっ……！　んむっ、
んっ、ごくっ、んむう……んむっ、ぢゅうううっ
……んぐ、ごくっ、じゅるるっ……」

【あすみ】

「はっ、はあっ……んむっ……せんぱい、私、上手
に……できていましたか？」

【あすみ】

「はいっ、嬉しいです。生徒会を引退しても、先輩
が卒業しても……いつまでも、このままの関係で
いたいって、そう思えます」

【あすみ】

「あ、じゃ、じゃあ……次は胸で挟みます、ね」

【あすみ】

「二度……いえ、いちにちに三度出すのは辛いです
か？　先輩にいろいろしたい気持ちはあるんです
けど……私も、愛してもらいたいので……」

【あすみ】

「がんばる……あっやっぱり限界はあるんですね。
いえ、先輩が大丈夫だと仰るのであれば……」

【あすみ】

「で、では、挟みます。あ、先輩、座ったままでは
なく、仰向けになっていたいただけと……」

【あすみ】

「あっ！　いま苦笑いしましたね。いえ、先輩の表
情を見る目には自信があります。ひよりんほどこ
はありませんけど……」

【あすみ】

「先輩は今、私が無い胸を無理に寄せて擦るのに、
疲れてしまわないか心配していますね。いえ、被害妄想ではありません。自信があります」

【あすみ】

「でもそうですね、先輩に氣を使わせてしまっても
申し訳ないので……いえ、卑屈ではありません。
せっかく仰向けになっていただいですし、手で
失礼します……ね」

【あすみ】

「頭を持ちあげるの、痛かったら言ってください
……はい？ 頭ですか？ はい、いくら絨毯が柔
らかいとは言え、床だと痛そうなので、膝枕をさ
せていただこうかと……」

【あすみ】

「んしょっ……ふふっ、先輩の顔がこんなに近く……」

【あすみ】

「ちゅっ……ごめんなさい、愛しさが抑えきれなく
て……先輩……ちゅっ、ちゅっ……」

【あすみ】

「では……手するのは慣れてないので、もし痛
かったりしたら言ってください……」

【あすみ】

「あ、痛かったときだけではなく、ダメ出しや細かい
指示も歓迎します。先輩は私に優しいので、遠慮
してしまうかもしれませんが、覚えていきたい
ので……」

【あすみ】

「あと、上手くできたときは誉めてもらえると、
もっと嬉しいです。誉められて伸びる子です」

【あすみ】「えっと……こんなふうに……上下に……擦って……」

【あすみ】「あっ、はい……大きくなったので、なんとなくわかりました……こうして先端を擦るだけで気持ちいいんですね」

【あすみ】「あまり強くしないほうがいいですか？ このくらいで……？ もっと強く？ はい……このくらいで……」し、って……」

【あすみ】「ふふっ、ごめんなさい、すごくよくわかります……こんなに硬く……大きくなっていたいたいので……こうですか？ 裏のほうを……手の腹で擦るといいんだっけ……」

【あすみ】「え？ 天使にこんな行為を覚えてほしくない？ 天使の羽根はとくに捨てました。今の私は先輩の恋人です」

【あすみ】「根元も……わしゃわしゃすると気持ちいいって、前に言っていましたよね？ こう、かき混ぜるみたいに……わしゃわしゃって……」

【あすみ】「ふとももの内側も……気持ちいいですか？ くすぐりたい？ ですか？」

【あすみ】「ふふっ、先輩がくすぐったそうにしてるのを見ると……私までドキドキしてしまって……」

【あすみ】

「先輩、好きです……ちゅっ、先輩……」

【あすみ】

「れろっ……あっ、ごめんなさい、いきなり……でも、私が先輩に耳を舐められると……我慢できないくらいいくすぐったくて……でも気持ちいいので、先輩にも……」

【あすみ】

「れろっ、れろ、れろっ……ふうっ……れろっ、れろっ……」

【あすみ】

「はあっ……耳を舐められながら擦るの、好きですか……？　すごく硬くなって……ちよっと、出たので……はい、このまま……出してしまっても構いませんから……」

【あすみ】

「あ、でも、このあとの分も残しておいてくださいね。出す量は調整はできない？　私、先輩のこと信じてます……！」

【あすみ】

「れろっ、ふうっ……反対側も……」

【あすみ】

「あっ、出そう……イキそうですか？　はい、出してください……いっぱい、出し……少し残して、いっぱい出してください……」

【あすみ】

「ちゅっ、ちゅっ……先輩、イってください……先輩の気持ちよさそうな顔……好きです……先輩、伊ってください……先輩……」

【あすみ】

「あっ、きゅってなって……！ 先輩、イキそうですか？ イケそうですか？ イってください、先輩……先輩っ……！」

【あすみ】

「あっ出たっ……！ 先輩、いっぱい出て……！ もっといっぱい……全部……は、まだ我慢してください、でもいっぱい出してください……！」

【あすみ】

「気持ちよかったですか？ ふふっ、イク瞬間の先輩の顔……好きです。とても愛しくて……ちゅっ」

【あすみ】

「はい、落ち着くまでこのまま……休んでください。あ、でも、拭いてあげないと……ティッシュ、手元に持ってきておけばよかった……」

【あすみ】

「ティッシュを持ってくるついでに、手を洗ってきますね。そのあとで先輩が回復したら……いっぱい愛してください、先輩」

08. 熱が冷めても余韻を引きずったりするよね！

【あすみ】

「んっ、ちゅっ……んむ、ちゅっ、れろっ……はあっ……ちゅっ、ちゅうつ……」

【あすみ】

「はっ、はあっ……ふふっ、先輩の頭を膝の上のせるのも愛しかったですけど……やっぱり、こうして抱っこしてもらってるほうが、安心しますね……」

【あすみ】

「私、子どものころから、両親にこれほど甘えていた覚えはなくて……はい、忙しいのもあったとは思いますが、優しくはあっても、べた甘……ではなかったと思うので……」

【あすみ】

「周りと比べて、特別厳しかったりはしないと思うんですけど……両親が恥ずかしい思いをしないように、人前ではある程度お行儀を意識していた気がします」

【あすみ】

「だからこんなに甘えてしまっているのは、先輩くらいだなあって……大好きです、先輩」

【あすみ】

「先輩にかわいがってもらうのも大好きで……特に今日みたいな、自分でも最高のパフォーマンスができたと思える日は……こうして、膝の上で頭を撫でてもらうと、精一杯がんばれたんだなって安心できます」

【あすみ】

「一人だったころは……みんなの感想を見て安心してたんですけど、中には当然厳しいお言葉もあって……自分への戒めにはなるんですけど、どうしても心がチクチクするので……」

【あすみ】

「私はまだ常磐先輩や詩桜先輩ほど強くはないへなちよこなので、こうして先輩のお力を借りて安心できると……次もがんばれる気がします」

【あすみ】

「それと、ひとりだったころは、体の熱の冷ましかたも……はい、新曲を公開した直後は、興奮して眠れなくて、外へ走りだしたいほど体が熱くて……文字通り、野山を駆け巡りたくて……でも、夜のお外は怖いので……」

【あすみ】

「感想を辿って、そのうち疲れて寝落ちしてしまつて、気づいたら朝……なんてパターンがほとんどで、それはそれで楽しかったんですけど、やはり誤爆のいいねやリツブヤキーが怖くて……別のアカウントから感想を見るようには心がけていたんですけど、人間、眠いときが一番怖いので……」

【あすみ】

「ですから、あの……振り返りと反省は気持ち落ち着いた明日にきちんとするので、今日はこの熱を……次へのやる気に昇華させてもらえると嬉しいです」

【あすみ】

「あっ！ そのために愛してほしいわけではなく、先輩との行為は先輩に愛してほしいのが一番の理由であって……！ 失礼なことを言ってしまったていたらごめんなさい……！」

【あすみ】

「はっ、はい……もっと素直に愛してもらえばいいだけなのに、興奮すると口数が多くなって……ごめんなさい」

【あすみ】

「先輩にめいっぱいかわいがってもらいたいです。たくさん愛してください」

【あすみ】

「ひゃっ！ あっ、いきなり、耳……は、もしかして、さっきのお返しですか？ 膝枕したときの……」

【あすみ】

「ちっ、違うって……でも、楽しそうに……やっ、ひうっ！ やっ、ひあっ、ひゃんっ！」

【あすみ】

「やあっ、あっ、せんぱい、耳くすぐったい……は、はい、私も先輩にしたので……逃げたりはしま、せん……」

【あすみ】

「でっ、でもっ、やっぱりくすぐった……やう、ひうッ！ やっ、ああっ、うう……んッ、はあっ、やあっ……み、耳、を、舐められるのは……体の中を、まさぐられているみたいで……」

【あすみ】

「あっ、やあっ……！先輩、あっ、耳っ、やっ、きやうっ！やんっ、ひあっ、やっ、んう……やっ、やんっ！」

【あすみ】

「ひあっ！やっ、反対も……んっ、やあっ、んくッ、はあっ……やあっ、せんぱい……かつ、体中の熱が、先輩の舌で溶かされて、じんとした愛しさに変わっていくような……」

【あすみ】

「はっ、ああっ……あっ、先輩、首は……くすぐったい、です……先輩……やああ……」

【あすみ】

「んっ、ふうっ、はっ、ああっ……先輩、好き、です……んっ、はああっ……せんぱい……ああ……」

【あすみ】

「ううっ、んッ、先輩……やっ、あっ、んう……あっ、やんっ……あっ、くすぐった……でも、愛しい……気持ちいい、です……」

【あすみ】

「今日はもっと……かわいがってください……先輩の好きにされて……愛されたいんです……」

【あすみ】

「あっ！やっ、胸……！あっ、ああっ、せんぱい……！」

【あすみ】

「えっ？あ、さっき……はっ、はい、先輩の胸を……吸いました、けど……」

【あすみ】

「やつ、ひゃんっ！ ご、ごめんなさい、吸うだけじゃなくて、噛みました……！ 先輩のお胸がかわいくて、我慢できなくて……！」

【あすみ】

「うっ、ううう……はっ、はい、私がしたことは、先輩にされても嫌がりません……ぜっ、全部受けいれて……どんなにもどかしくても耐えます……！」

【あすみ】

「あっ、やあっ……んっ！ やっ、ひゃんっ！ んッ、ひうっ、やああっ、あ、あのっ、やあっ……！ つ、つまんだりは……！」

【あすみ】

「ひあああっ！ そんっ、なに、強く噛まれると……やつ、やあああんっ！ ひゃんっ！ 先輩、あッ、やあっ、我慢できません、せんぱい……！」

【あすみ】

「うっ、ううっ、たしかに私も、先輩に同じことをしましたが……！ んッ、やうっ、あっ、はあっ……！」

【あすみ】

「やあっ、先輩、今日は特に手つきが……いやらしい、です……あっ、んうッ……！ い、いえ、そのほうが……私も……！」

【あすみ】

「あっ、やつ、先輩に、胸を……いじってもらえるのが、好きで……先輩が目の前にいるのに、すごく切ない気持ちになって……！」

【あすみ】

「んくッ、やつ、この切なさが、今はすごく心地よくて……あつ、んッ、気持ちいいのに、どこか物足りなくて、もっともっと愛されたくて……」

【あすみ】

「やあつ、あッ、んんっ……やつ、んっ、ううっ……先輩……好きです、先輩、この時間が夢みたい……ああつ、やつ、思えて……やああつ」

【あすみ】

「あつ、先輩……もっと奥深くまで……中まで、愛してください……いま挿れてもらえたら、私……」

【あすみ】

「んっ、くうっ、ああっ……ひうッ、んっ、ああつ、先輩……あつ、あのっ、2回も出させてしまつて、ごめんなさい……だ、大丈夫、ですか……？」

【あすみ】

「あつ、こんなに硬く……大きく……よかった……さつ、さすがは先輩……ですね！　すごく頼りになります……！」

【あすみ】

「ときどき、私のへなちよこな体では、先輩がいやらしい気持ちにならないのではないかと心配になるんですけど、安心できました」

【あすみ】

「いっ、いえ、普段から気にしているわけではないんですけど、いやらしいことをするときは、先輩に喜んでほしい気持ちがあります、から……」

【あすみ】

「薄い板のような体なので……常磐先輩や詩桜先輩に憧れる気持ちはあり、ます……」

【あすみ】

「あっそんな！ やっ、どどっ、どうして急に胸を……やあっ！ そんなに吸っては……やっ、ひやッ！ やんっ、ひあんっ！」

【あすみ】

「うう、先輩は意地悪です……で、でも……気持ちよかった、です」

【あすみ】

「先輩に触れていただくと、それだけでいつも気持ちいいので……幸せになれますから、先輩は私にとって、本当に……神様みたいな人です」

【あすみ】

「もっと幸せに……してください」

【あすみ】

「んッ！ あっ、先輩……！ んくッ、あっ、入って……！ 先輩が、奥まで入ってくるのがわかります……！」

【あすみ】

「あっ、やあ……んっ！ あっ、はあっ……！ あっ、幸せです……！ 先輩を体の中で感じられて、私っ……！ ふああっ……！」

【あすみ】

「先輩っ……！ あっ、好きです、やっ、あんっ！ ひあっ、いちばん、奥まで届いて……やっ、あうっ、んんッ……やんっ！ ひうっ、あんっ！」

【あすみ】

「先輩……！ 大好きです、やん、ひあんっ！
もっと、奥まで……いっぱい先輩を感じさせて
……抱きしめてください……！」

【あすみ】

「やあっ、先輩に抱きしめられながら、挿れてもら
うの好き、なんですっ……！」

【あすみ】

「やあああっ……！ あっ、んッ、激しく、してく
ださい……今日はッ……もっと、責められたくて
……先輩の、好きにされたくて……先輩に愛され
ている実感が欲しくて……！」

【あすみ】

「ああッ、あっ、やあああっ……！ 好きですっ、
先輩っ、あっ、んッ……！ ふうっ、あっ、や
あっ、今日だって……！」

【あすみ】

「シキは……多くの人にシキの声を聞いてもらっ
て、歌を聴いてもらって、ひとつずつその喜びが
大きくなっていく中で……私自身は、どこかに取
り残されてしまわないか、小さな不安がいつも
あって……」

【あすみ】

「でも、私を私のまま愛してくださる先輩がいてく
れるお陰で……ちっぽけな私でも、自分の存在を
確かめられて……安心できます」

【あすみ】

「先輩っ……好きです、先輩に愛してもらえて幸せです……やつ、んッ、ごめんなさい、エッチの途中にいつも……でも、幸せで満たされているのを伝えたくて……先輩に幸せを伝えようと、気持ちよくなれるので……！」

【あすみ】

「あくッ、ひあっ、あっ、やああっ！ 先輩、あっ、やつ、気持ちいいです、ああっ、んッ、もっと奥まで……ひあっ、あッ、今日は特に……満たされて……！」

【あすみ】

「ああっ、こんなに気持ちいいのは、前のライブのときと……あっ、ひあんっ！ 大きな舞台のあとには、特に感情が昂って……！」

【あすみ】

「あっごめんなさい普段のエッチと比べているわけではなく、今日は特別と言いた——」

【あすみ】

「——ひやああんっ！ せっ、先輩、どうして激しく……やあああん、謝らせてくださいっ……！先輩は意地悪ですっ、やあんっ！」

【あすみ】

「やつ、ああっ……んッ、もうっ、先輩……でも、そんな意地悪なところも、大好きです……んっ、やあっ……好きです……！」

【あすみ】

「あっ、はああっ……先輩が奥に感じられて……やつ、んうっ……やあっ、そこへあてられると、もう、なにも……言えなくなってしまうて……！」

【あすみ】

「やつ、ああッ、んっ、先輩……あっ、はあっ、やうッ……！ んくッ、あんっ、やあっ、はあっ……あんっ……！」

【あすみ】

「あっ、ひうっ……やつ、今日はライブが終わってからずっと……先輩に愛されたかったので、もうっ……」

【あすみ】

「え、打ち上げのときも……？ そっ、それはその、みなさんと話しているときは、さすがに……んッ、でも、したいな、とは……」

【あすみ】

「うっ、うううっ、いやらしいことを考えてごめんなさい……やつ、んうっ、天使の名はとくに返上していますけど、先輩をがっかりさせてしまっていたら、許してください……あっ、ひやっ、んっ！」

【あすみ】

「いっ、今は……イキたい、です……先輩に激しくしてもらって……こ、このままっ……！」

【あすみ】

「あっ、やあっ……！ せっ、先輩、いま激しくされたら……ううっ、んッ、あっ、いえっ……すぐ、よくて……あっ、やあんっ、ひあっ……イケそう、ですっ……達し、ますっ……！」

【あすみ】

「ああああっ……！ あっ、ダメです、ひっ、奥にグリグリあたって……！ んッ、果てます、ああっ、うやっ！ んッ、あっ、やんっ、ひああっ！」

【あすみ】

「やあっ、イケます、イキますっ……！ はあっ、だめで……んッ、くうっ、あっ、い、いいです……あっ、このまま……ああっ、先輩といっしょに……！」

【あすみ】

「ひゃんっ、ああッ、やん、ひあんっ！ んうッ、あっ、あんっ！ やっ、はああっ……んっ、くっ、やあっ、そこでっ……あっ、奥にっ！」

【あすみ】

「んっ、ううっ……せん、ぱい……あのっ、キス、しながら……」

【あすみ】

「んむっ！ ちゅっ、んむう……ちゅっ、んちゅっ、れろっ、はっ、はあっ、んっ……！ ちゅっ、れろっ、ちゅうっ、れろっ……んっ、んむっ、んちゅっ！」

【あすみ】

「あっ、やあっ……！ ひっ、ごめんなさい、キスしたままイケたらと……思ったん、ですけど……やんっ！ こ、声っ、我慢しないほうが、きもち、よくてっ……！」

【あすみ】

「やああっ、ひああああんっ！ 果てます、このままっ……！ あっ、やっ、このまま、先輩に抱かれて……好きな人の腕の中で、二人で……！」

【あすみ】

「あっ、やあっ、せんぱいっ……ああッ、んっ、あっ、もっと激しく……あっ、やあっ！ 奥までっ……あっ、やあっ、ああッ！」

【あすみ】

「せつ、せんぱいっ、出そうですか？ 私はっ……あっ、ひんッ！ やあっ、もうっ……ああっ、ごめんなさい、このままだとすぐになっ……あっ、あああっ！」

【あすみ】

「せつ、先輩のが、下から奥まで出たり入ったりするたびに……あっ、ひあああっ、今にでも、達しそうで……！」

【あすみ】

「あっ、やあああっ！ そこっ、だめですっ、イキますっ……！ あっ、もうだめっ、ああっ、でもっ……とめないでくださいっ……！」

【あすみ】

「ひあああっ！ やうッ、あっ、やうんっ！ んくッ、あっ、ああああっ、せんぱいっ、ああっ、やああんっ！ ひゃあんっ！」

【あすみ】

「あっ！ せんぱいごめんなさい、もうっ……あっ、ああああああっ、強い波がきて……だめです、ああッ！ やん、あああああっ！ もっ、もうっ……イキますっ！」

【あすみ】

「やああああああああっ！ やっ、ひあっ、すっ……ああああああっ！ あっ、ああっ、やああああああんっ！」

【あすみ】

「あっ、ああっ、やっ、せん、ぱいっ……ごめんなさい、耳元で……大きな声を出してしまっ……！」

【あすみ】

「でっ、でも、すくきもちよくて……やつ、まだ波が……はあっ、とても、満たされて……」

【あすみ】

「今日はその、せんぱいにして欲しかったので……ありがとうございます……」

【あすみ】

「あっ、先輩は……！　せ、先輩はどうでしたか？　ちゃんと気持ちよく……なれましたか？」

【あすみ】

「そうですか、よかったあ……あっ、はい、先輩がイケたのもですけど、先輩といっしょに……気持ちよくなれたので」

【あすみ】

「気持ち繋がってるっていいですね、先輩とひとつになれたみたいで……嬉しいです」

【あすみ】

「んっ……先輩の優しいキスも好きです、ふふっ……」

【あすみ】

「あ、ところで先輩……あの、今日は先輩、いっぱい出しましたが……何度も……」

【あすみ】

「お、男の人って、いちにちにどのくらい出せるものなんですか？　あ、いえ、深い意味はなく、興味で……あの」

【あすみ】

「あっ、いえっ！　あのっ、またしたいと言いますか……！　せっ、先輩に抱きしめてもらうのが、たまらなく心地よかったので……その幸せを、また味わえたらと……！」

【あすみ】

「はっ、はい……先輩ができるのなら、また……していただいても……休憩をしたら……」

【あすみ】

「い、いつになく肉食ですか？ ううう、ごめんなさいい……今日は一段と体の熱がすごくて……もっと気持ちいいことをしたくて……」

【あすみ】

「あの、打ち上げ会場では周りのV T u b e rさんとお話ばかりして、あまり食事をとらなかったの、シャワーを浴びたら、先輩と軽いお食事もできたらなあって……」

【あすみ】

「はい……疲れたあとに、おなかいっぱい食べたら、今日はぐっすり寝られそうですね。さすがに、部屋は鳴門さんのいる部屋に戻りますけど……」

【あすみ】

「心が空いたら気持ちいいことをして、お腹が空いたらごはんを食べて、満足したら眠る……もう天使でもなんでもありませんね。今日からお肉の妖精を名乗ります。よかったら先輩のお部屋で飼ってください」

09. フィナーレ・愛のワルツ

【あすみ】「いつもライブのあとは付きあっていたいただいてごめんなさい……」

【あすみ】「あっいえ、先輩に同行をお願いしているのは、もちろんそれだけが目的ではなく……！　いつも支えていただいているからと言いますか……！」

【あすみ】「は、はい、そうですね、先輩は誤解したりせずに、私の言葉を受けとってくださいるので……私が心配性なだけです」

【あすみ】「でも、そんな私とも、先輩はお付きあいしてくださいだったので……あっ、ひ、卑屈にはなっていないません」

【あすみ】「ただ、周りに馴染めないのは事実なので……ひょりんがいなければ、教室にお友だちもいません」

【あすみ】「卑屈にはなっていないつもりですけど、自分がへなちよこだなあと思います。生徒会のみなさんは、奇跡みたいに誰とでも話題が合いましたけど、教室のみなさんとは共通の話題が見つけれなくて……自分から積極的に動いたりも、私にはできません」

【あすみ】「そんな私でも、図々しくなれるくらい積極的に会いたくて、話したくて、お付き合いしたい人が先輩です。素敵な人だなあっていつも思います」

【あすみ】

「だから、こんな私と付きあってくださいって……という意味ではなく、私を選んでくれてありがとうございますという意味での『付きあってくださいって』なんです。あ、あの、伝わってますか？」

【あすみ】

「あっ笑わないでください笑わないでください！うっ、うううう……！でも、笑ってもらえると救われる私もいます」

【あすみ】

「もう生徒会にいたころの時間は戻ってきませんけど、私のとなりで先輩がいつも笑っていてくれれば……こうして思い出話を聞いてもらえれば、いつでもあのころに戻れるんだなあって、思えます」

【あすみ】

「あの楽しかった時間に、いつまでもしがみついていたはいけないとわかってはいるんですけど、たまに逃げこむとすごく元気が出るので……これからも先輩に甘えさせてください」

【あすみ】

「あ、ですから……友だちはいませんけど、登校は好きです。思い出のある学園ですから、卒業もするつもりです。生徒会室の前を通ると、いまだに中を覗いてしまうのは、自分でも少し怖いなあって思います、けど」

【あすみ】

「その先輩と過ごした学園とも、もうすぐお別れなので……卒業したら自由な時間が増えますね。毎日のようにお邪魔してしまうかもしれません」

【あすみ】

「いつ、いえ、さすがに私のものを置いたりは……
でっ、でも、またお泊りはしたいです。ひよりん
の顔も見たいので……」

【あすみ】

「なにより先輩のそばにいたいので、お邪魔でなけ
れば、先輩の家の観葉植物としておうちに置いて
やってください」

【あすみ】

「私と出会ってくださってありがとうございます」

【あすみ】

「これからとなりで……私が少しだけがなればた
ときは、頭を撫でてくださいね、先輩」

【あすみ】

「んっ」

10. ハミンググループ

【あすみ】

「ふんふん〜……」

【あすみ】

「(隣で座っているだけの吐息)」

1 1. ひつじループ

【あすみ】

「ひつじが1匹、ひつじが2匹……」

【あすみ】

「ひつじが97匹、ひつじが98匹……」

【あすみ】

「ひつじが、99匹……」

【あすみ】

「ひつじ……ひゃ……くう……すう……」

【あすみ】

「はっ！ ご、ごめんなさい、先輩！ 私、途中まで数えてたのに……寝てしまいました」

【あすみ】

「何匹まで数えましたっけ……ごめんなさい、思いだせないので最初から数えますね！」

1 2. 二度寝用目覚まし

【あすみ】「せ、先輩。もうそろそろ、起きる時間だと言っていますんでしたか……?」

【あすみ】「あの、先輩。起きてください……今日の予定が後ろにずれてしまいますよ? 起きてください、先輩」

【あすみ】「うう、私が先輩に厳しくできないのをわかっていて……先輩、起きてください……せんぱいーっ!」

【あすみ】「あ、あの……これ以上は本当に……だから起きてください、先輩?」

【あすみ】「えっ、キスを……してくれたらって……せ、先輩……それで、本当に起きてくれますか?」

【あすみ】「先輩……いえ、起こすためだけではなく……先輩と、こうしていられるのが嬉しいので……」

【あすみ】「ちゅっ」

【あすみ】「せっ、せんぱいいいいい……! キス、すれば起きるって、言ってくれたのに……よけい気持ちよさそうに眠って……ううう」

【あすみ】「先輩は意地悪です……めっ! です!」

【あすみ】

「でも、そんな先輩が大好きですから……あと少しだけ、甘やかしてしまいますね。また5分経ったら起こしにきます」

【あすみ】

「おやすみなさい、先輩。ちゅっ」

【演出】「約10分間の無音パートを収録しております。ループ再生などで「自由にお楽しみください。」